

本論文は、近世琉球の国際的位置がいかに形成され、かつ維持されていたのかを、東アジアの国際状況と琉球の国家的営みとの双方から時間軸に沿って検証し、近世琉球の国家的特質とその歴史的意義を新たな視点から解明しようとしたものである。近世琉球が中国と日本との二重の支配秩序のもとにあったこと、そしてそのなかで琉球自身が独自の政策に基づく主体的な国家運営を試みてきたことは、従来の研究においても主要なテーマとして論じられてきた。そのなかで本論文の特色は、第一に、近世琉球の国際的位置の背景をなす中・日間の関係につき、歴史的展開を踏まえた構造的な理解を試みている点にある。中・日の支配秩序の相互関係を単なる併存或いは対抗とみなすのではなく、むしろ日本（徳川幕府）に対し中国（清）を優位とする序列的構造が近世初期に形成され、東アジア共通の認知的枠組となっていたと捉えることによって、琉球を始めとする諸勢力の動きを、その枠組との関係でより内在的に分析することが目指されている。第二の特色として、中・日の支配秩序の重層する「狭間」における潜在的な矛盾を、琉球がどのように処理し、安定的な関係を維持しようとしていたか、という問題を実証的に考察した点が挙げられる。本論文では、琉球への漂着民の処遇を切り口として、矛盾の顕在化を慎重に回避しようとする琉球側のテクニックの形成過程と実態を克明に検討している。

構成は三部に分かれる。第一部では、16世紀末の豊臣秀吉の朝鮮侵略前後から明清交替を経て清朝支配が安定する17世紀後半までの時期を扱い、中国側の史料を活用して、近世琉球の国際的位置の形成過程を論ずる。第二部では、琉球—清朝間の漂流・漂着問題を取り上げ、漂着民の送還方法、船隻・積荷の処理方法、漂着民に対する琉日関係の隠蔽の方法、などを主に琉球側の史料を用いて考察する。第三部は、近世琉球政治の中心人物の政論を分析しつつ、二重の支配秩序の結節点ともいうべき役割を果たしてきた琉球の政策が、どのような琉球の国家体制と国家意識に支えられていたのかを論ずる。

本論文は、東アジア全体を見通す広い視野と、漂着問題を事例とする具体的で詳細な分析とを緊密に結び付け、かつ16世紀から19世紀に至る歴史の流れのなかで動的に論ずることによって、近世琉球の国際的位置を生き生きと描きだすことに成功している。特に、精力的な史料探索を通じ、中国史料と琉球史料との双方を十分に使いこなしている点は、日本史・東洋史の枠を超えた業績として高く評価し得る。本研究の問題関心は、琉球に止まらず、対馬やシブソンパンナー、カザフなど諸支配秩序の「狭間」にある諸地域にも広がる射程をもち、学界に広くインパクトを与えることが可能であろうと考えられる。

ただ、第一部・第二部に比べ、琉球の国際的位置を琉球自身の国家体制・国家意識の展開過程と結びつけて論じようとした第三部はやや手薄の感がある。また、中・日の支配秩序の間のより複雑で緊張をはらんだ関係の把握や、その関係の背景にある経済的な動向の分析など、今後発展させてゆくべき課題も少なくない。しかしそれは、第一部・第二部の充実した考察の価値を減ずるものではない。以上より、本委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい業績と認定するものである。